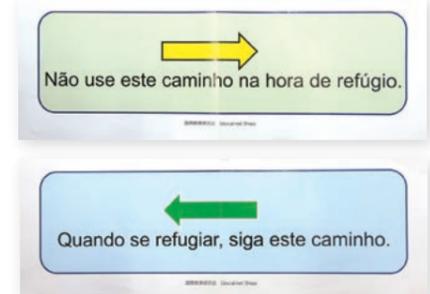


地震があっても怖くない！ 外国人に優しいまちづくり

地震が起こった時、真っ先に気になるのが「情報」。でも、もしその国の言葉が分からなかったら……。災害時でも外国人に優しいまちづくりを目指し、滋賀県の教員たちが「体験型」の教材開発に取り組んだ。



「どちらが飲料水でしょう」。避難所で水の配給があった時、外国人にも分かりやすい案内の仕方について考える。正解は、ロシア語で①は飲料水、②はトイレ用の水



ポルトガル語の避難経路の標識。黄色は「ここは通ってはいけません」、緑は「この経路を使いましょう」の意味。逆方向に行ってしまうと大変だ

言葉が分からないという恐怖
ガタ、ガタガタ、ガタガタガタガタガタ!!
「震度5の地震が起きました。揺れが収まったら、速やかに近くの避難所に向かってください!」

突然の大きな揺れ。わけが分からず、動揺してしまうのは、誰もが同じはずだ。しばらくして、ハッと冷静になって、反射的にテレビやラジオをつける。どれくらいの規模の地震か、震源地はどこか、そして、どこに避難すればいいのか。流れてくる情報に従って、次の行動を決めなければならない。
でももし、その情報がすべて外国語だったとしたら……。どうすればいいから分からず、パニックになってしまいうらう。
「ここに2種類の水があります。どちらを飲んだらいいでしょうか?」
所変わって、滋賀県のある中学校の教室。2本のペットボトルにはそれぞれラベルが付いているが、印刷されているのは見慣れない言葉。日本語ではないので読めない。
「こっちは何?」
「いや、こっちはだよ」
生徒たちはその文字の意味を想像しながら、2つのグループに分かれる。そして、実際にその水を飲んでみると……。先生から答えの発表だ。
「これはロシア語です。①は飲料水、②はトイレ用の水と書いてあります」
「えー!!」
②を選んだグループの生徒たちから、悲鳴のような驚きの声上がる。「避難所で水が配られる時、外国人だったら起こり得る状況ですよ。先生の言葉に、生徒たちは深くうなずく。

外国人の立場になって考えてみよう

地震が起こった時、言葉が分からないという不安は想像に難くない。日本でも地震が起こるたびに、課題になっていたのが外国人への対応だ。

そこで手を挙げたのが、滋賀県の国際教育研究会「Glocal net Shiga」。公益財団法人滋賀県国際協会が中心となり、県内の現職教員をはじめ、青年海外協力隊の経験者、NGOのスタッフなどが集まってできた組織。キーワードは「グローバル(世界)とローカル(地域)」をつなぐ、ネットワークだ。

滋賀県は日系ブラジル人をはじめ、外国人が多く居住している。地震の時、彼らがどんな不安を抱えているのか。まずは私たちが理解しなければならぬ



滋賀県内の学校では総合的な学習の時間などで教材を活用。外国人に優しいまちづくりを目指す



「周りには、外国人には理解できない言葉がたくさんある。緊急災害時だけでなく、日常の救急通報にも生かしたい」と消防隊員たち

い。そんな思いで、Glocal net Shigaのメンバーが作成した教材が「言葉がわからない」体験ゲーム「何が起った? (震災編)」。ロシア語のラベルの水を飲み比べるのも、この教材を使った授業の一コマだ。
「地震が起こったら、外国人のクラスメートはどのような不安を感じるのか。それを子どもたち感じてほしいと思っただけです」と、中心メンバーとして教材開発にかかわった大森容子さん(滋賀県国際協会。町内放送のスピーカーから流れる情報が聞き取れない、避難経路の標識が読めない、配給をもらうにもルールが分からない)。外国人が直面するであろう、さまざまな状況がDVDに収録され、疑似体験できる内容になっている。

「言葉が通じないこと、文化背景が異なること、災害時に摩擦が起りかねないということ」を伝えたかった」と大森さん。2007年の新潟県中越沖地震など、これまで被災地で実際に起こったエピソードを盛り込んだ。
授業を受けた生徒たちは、外国人の「不安」を肌で実感した様子。「言葉が分からないことが、まさか命にかかわるなんて」。看板などは外国の人にも分かりやすく書いた方がよいと思いましたが、「助け合い」の大切さを学びました。外国人の人が困っていたら、優しく分かりやすく案内できるようにしたい」などと話してくれた。この教材が完成したのは、奇しくも、東日本大震災の直前。災害対策への意識が高まる中、学校だけでなく、県の消防学校や地域の自治会など、さまざまな場で活用されている。



教材を使った学びを経て、小学生が外国人向けに作った避難所を示す標識。ポルトガル語、スペイン語、韓国語、英語などさまざまな単語が盛り込まれている

「普段から「コミュニティとの付き合いがあれば周りの人が助けてくれるかもしれません、すべての人がそうではない。言葉が分からなくて困っている人がいる」ということを、この教材を通して、知ることで、いざという時に手を差し伸べられる人が増えてくれれば」と大森さんは期待する。
外国人に優しく、災害に強いまちづくり。滋賀県発の取り組みが全国各地に広まり、いつ、何が起ころうとも、みんなで助け合える日本になることを願う。



「言葉がわからない」体験ゲーム「何が起った? (震災編)」は、購入、貸出が可能。詳しくは、Glocal net Shiga (siamail@mx.biwa.ne.jp)まで

